

日本の甲冑を現代風にアレンジし 世界に誇れるブランドへ

根本崇史 埼玉／プロダクトデザイナー

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催・LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッション

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月17日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。埼玉県選出の匠、プロダクトデザイナーの根本崇史さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



プレゼンテーションをする根本さん

ンを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて半年をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではチームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE WITH NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。埼玉県選出の匠、プロダクトデザイナーの根本崇史さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

幼い頃からモノ作りの環境で育つ

金属加工業を営む祖父、電気回路の設計者の父を持つ埼玉の匠・プロダクトデザイナーの根本さん。気が付けば、いつもそばにモノ作りの環境があふれていた。そんな根本さんがこの道に進んだのも自然な流れだったのだろう。



バッグの革を裁断する

小学校時代、周りの友達とは当時流行っていた、たくさんのおふたがついた筆箱を持っていた。一方、根本さんが親からもらったのは本革の大人びた筆箱。今となってはいい物だと理解できるが、幼心に友達達の筆箱がうらやましかったという。学校から帰ると、毎日のように厚紙を使って筆箱作りに励んでいたエピソードを覚えてくれた。

中学を卒業すると、父親の転勤でマレーシアへ渡ることが、現地の高校が2年制だったため、単身シンガポールの高校で寮生活しながら3年間学び、国際的な視野を広げた。帰国後、日

細部までクオリティにこだわる

大芸術学部デザイン学科に進み、本格的にデザインの勉強を始めた。卒業後は車載器メーカーに就職し、企業内デザイナーとして新規事業開発などに8年間従事。ヨーロッパのデザインの勉強をするため会社を退職し、スイス州立ローザンヌ美術大学大学院を卒業して、現在はフリーとしてデザインの仕事を手掛けている。

今回根本さんが取り組んだのは、日本の甲冑の特徴的な意匠にインスピレーションを受けたバックパックだ。その名も「YOROYOY(ヨロイ)」。甲冑の身を守るための意匠をカバンの中身を守るための意匠に置き換えた。甲冑や五月人形は時



試作段階で金属におどし紐を通す

金属へのおどし紐の通しは越谷市の五月人形製造の忠保、金属加工は熊谷市の今泉工業、かばん本体は八潮市のジェイクラフトマンの協力を得た。この出会いもい刺激になったそう。職人の技術を目の当たりにした根本さんは、高いクオリティと日本独自の意匠でヨーロッパの名だたるブランドと張り合える「日本にもこんなに素晴らしいバッグが作れるのか」と思われるようなブランドとし

代の流れとともに縮小傾向にある。この素晴らしい技術を後世に残す意味でも、根本さんは徹底的にクオリティにこだわったという。江戸甲冑はその名のとおり東京で育ってきた伝統工芸だが、第2次世界大戦の空襲から逃れるため、現在では埼玉で多くの職人が活躍している。

生駒氏から「レザーと金属物という異素材の組み合わせはおもしろい。エレガ



エリア・コンサルティングの様子



パソコンに向かい作業する根本さん



根本 崇史
埼玉／プロダクトデザイナー

埼玉県生まれ。車載器メーカーで勤めた後に、スイス州立ローザンヌ美術大学(ECAL)を卒業。在学中に制作した「FUBUKI」がサン・ディエゴ国際デザイン・ビエンナーレなどで展示される。現在はグローバルとローカルの両視点を含み、プロダクトデザイン・ブランディングなどの活動を行う。2015年エル・デコ・ジャパンから「ヤングジャパニースデザインタレント」を受賞。



完成プロダクトのバックパック「YOROYOY(ヨロイ)」



パーツにも細かいこだわり

て、世界に展開していきたくて考えている。
新たなモノ作りへのきっかけに

デザイナーである根本さんは「この『YOROYOY』を見て、全国の伝統工芸に携わる職人さんが、これまでの殻を破って新たなモノ作りへのきっかけにしてみたら、自分でもそのお手伝いができたらどうもうれしい」と話してくれた。また、お客さまに対しては「日本の甲冑ってかっこいいなあ。細かい作業ですごいなあと感じてほしい。日本古来の伝統文化をただ眺めるだけではなく、実際に使ってもらって、自分の生活に取り入れてほしい」と希望している。



サポートメンバーのグエナエル・ニコラ氏と

今後の目標を聞くと「まずは今回のプロダクトをブラッシュアップして、欲しいと言ってくださる方に届けること。そして今回出会えた多くの匠たちと、次世代に繋いでいける日本の技とモノ作りを世界に発信していきたい。東京オリンピック・パラリンピックに向けて匠たちとコラボレーションできたら最高ですね」と目を輝かせていた。

